

【B年】復活節第3主日(2022年5月1日)

【旧約聖書日課】エゼキエル書 34章7～15節

7それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。8わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。9それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。10主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

11まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をす。12牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。13わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。14わたしは良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。15わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 5章1～11節

1さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。3ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。4そうすれば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしばむことのない栄冠を受けることになります。

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、

「神は、高慢な者を敵とし、
謙遜な者には恵みをお与えになる」

からです。

6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです。

8身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみと遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおりです。10しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてくださいます。11力が世々限りなく神にありますように、アーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章7～18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛して下さる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書 34章7～15節

7それゆえ、牧者よ、主の言葉を聞け。8私は生きて
いる——主なる神の仰せ。私の群れは牧者がい
ないため、略奪に遭い、あらゆる野の獣の餌食と
なっているというのに、私の牧者は群れを尋ね求
めもしない。牧者はわが身を養うが、群れを養わ
ない。9それゆえ、牧者よ、主の言葉を聞け。10主
なる神はこう言われる。私は牧者に立ち向かう。
私は彼らの手から私の羊の群れを尋ね求め、彼ら
に群れを養わせない。牧者は二度とわが身を養え
なくなる。私は彼らの口から私の群れを救い出す。
私の群れが彼らの餌食となることはない。

11実に、主なる神はこう言われる。私が自ら自分
の群れを尋ね求め、彼らを探し出す。12牧者がその
群れを散らされたときに自分の群れを探し出すよ
うに、私は自分の群れを探し出す。私は彼らを、
雲と密雲の日に散らされたあらゆる所から救い出
す。13彼らをもろもろの民の中から導き出し、国々
から集め、彼らの土地に連れて行く。私はイスラ
エルの山々と涸れ谷で、この地のすべての居住地
で彼らを養う。14私は良い牧草地で彼らを養う。イ
スラエルの高い山々は彼らの牧場となり、その地
で彼らは良い牧場に伏し、イスラエルの山々の豊
かな牧草地で草を食む。15私は自分の群れを養い、
彼らを伏させる——主なる神の仰せ。

ペトロの手紙一 5章1～11節

1私は長老の一人として、また、キリストの受難
の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、
あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなた
がたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しな
さい。強制されてではなく、神に従って、自ら進
んで世話をしなさい。恥ずべき利得のためにでは
なく、本心から、そうしなさい。3割り当てられた
人々を支配しようとはせず、むしろ、群れの模範に
なりなさい。4そうすれば、大牧者が現れるとき、
あなたがたは消えることのない栄冠を受けること
になります。

5同じように、若い人たち、長老たちに従いな
さい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。

「神は、高ぶる者を退け、
へりくだる者に恵みをお与えになる」
からです。

6ですから、神の力強い御手の下でへりくだりな
さい。そうすれば、しかるべき時に神はあなたが
たを高くしてくださいませ。7一切の思い煩いを神
にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心
にかけていてくださるからです。

8身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがた
の敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰
かを食い尽くそうと歩き回っています。9信仰をし
っかりと保ち、悪魔に立ち向かいなさい。あなた
がたのきょうだいたちも、この世で同じ苦しみに
遭っているのは、あなたがたも知っているとお
りです。10しかし、あらゆる恵みの源である神、キリ
ストを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてく
ださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦
しみの後で癒し、強め、カづけ、揺らぐことがな
いようにしてくださいませ。11力が世々限りなく
神にありますように、アーメン。

ヨハネによる福音書 10章7～18節

7イエスはまた言われた。「よくよく言うておく。
私は羊の門である。8私より前に来た者は皆、盗人
であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うこ
とを聞かなかつた。9私は門である。私を通して入
る者は救われ、また出入りして牧草を見つける。
10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼした
りするためにほかならない。私が来たのは、羊が
命を得るため、しかも豊かに得るためである。11私
は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命
を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇
い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにし
て逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。
——13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていな
いからである。14私は良い羊飼いである。私は自分
の羊を知っており、羊も私を知っている。15それは、
父がわたしを知っておられ、私が父を知っている
のと同じである。私は羊のために命を捨てる。16私
には、この囲いに入っていないほかの羊がいる。
その羊をも導かなければならない。その羊も私の
声を聞き分ける。こうして、一つの群れ、一人の
羊飼いとなる。17私は命を再び受けるために、捨
てる。それゆえ、父は私を愛してくださる。18誰も私
から命を取り去ることはできない。私は自分でそ
れを捨てる。私は命を捨てることもでき、それを
再び受けることもできる。これは、私が父から受
けた戒めである。」

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・5月1日「復活節第3主日」の日課主題は「まことの羊飼い」。「復活節」中に「ヨハネ福音書」から「良い羊飼い」を主題として取り上げる習慣が、伝統的な教会で古くから続いている。教会共同体の真の牧者として、復活の主であり「良い羊飼い」であるキリストを記念し、地上の組織としてのあり方を定めてきた。現代の改訂共通聖書日課では、「復活節第4主日」が「良い羊飼いの主日」として位置づけられている。

・福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「良い羊飼いのたとえ」の箇所。旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、「イスラエルに立てられた牧者」の預言の箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、「神の羊の群れを牧する者としての長老」に向けた勧告の箇所。

旧約日課(エゼキエル 34章より)

・「エゼキエル書」は、旧約三大預言書の一つで、ユダヤ教正典「後の預言者」の第三に置かれた、バビロン捕囚下で告げられた預言の書。預言者エゼキエルは、南王国に対してバビロニアが最初の侵攻をしてきた第一次バビロン捕囚時(前 597年ごろ)、祭司身分にある者としてバビロンに捕囚として移住させられ、その後5年目に預言活動を始めたとき(1:1-3)。このとき、祭司身分の者がすべて捕囚として連行されたわけではないので、おそらくエゼキエル本人もしくは父ブジが「宮廷預言者」として王宮仕えしていたために、捕囚対象となったヨヤキン王をはじめとする王侯貴族に仕える者として捕囚に伴ったのだろう。エゼキエルの預言活動が捕囚から5年目とされていることは、その時点までエゼキエル本人は「宮廷預言者」としての地位になかったことを示唆するが、そうであれば、父ブジが「宮廷預言者」であったために、その子として同行したということだろう。エゼキエルの預言活動は、そのときから始まって、第二次バビロン捕囚(前 589年ごろ)を経て捕囚中期にまで及んだと考えられる。

・日課箇所は、イスラエルの回復を告げる大きなまとまり(33-39章)の中に位置し、イスラエルに立てられてきた指導者たち(王侯貴族)が退けられ、神ご自身の意に沿う新しい指導者が立てられることが、イスラエルを羊の群れとたとえる形で告げられている。

・「エゼキエル書」は、「エレミヤ書」と重なる時代の預言者の書であり、おそらく預言者エゼキエルは預言者エレミヤと同じく、ヨシヤ王時代に始められた改革の担い手となった祭司＝預言者の系譜に属する者であるが、自国に対する呼称の用い方には大きな違いがある。両預言書とも「イスラエル」を多用するが、「エレミヤ書」は同時に「ユダ」を多用するのに対して、「エゼキエル書」で「ユダ」が用いられるのは限定的である。日課箇所も、「ユダ」の回復ではなく、「イスラエル」の回復という表現で告げられている。

使徒書日課(Ⅰペトロ 5章より)

・「ペトロの手紙一」は、使徒ペトロが協力者シルワノの手によって記した書簡として著されている(5:12)。宛先は「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビテニアの各地に離散して仮住まいしている選ばれた人たち」(1:1)とされており、もっぱらアナトリア半島地域の諸教会に向けられているが、実際にこれがどのように回覧・頒布されたのかは分からない。書簡が著された場所として「バビロン」(5:13)が示されているが、一般にはローマを指す隠語としての「バビロン」と解釈されている。実際、ペトロはある時点からローマの教会共同体の指導者として定住生活をしていたと考えられる。しかし、当時のディアスポラ・ユダヤ人の主要な居住地として、ローマ帝国外の「バビロン」も無視できない存在感を持っており、文字通り「バビロン」を指しているという可能性も排除できない。とは言え、本質的には「ローマ」であっても「バビロン」であっても、書簡の趣旨に影響はなく、いずれの地であろうと、「ユダヤ地方」から離れた異国に「仮住まいの身」であることを「バビロン捕囚」の故事に重ね合わせながら、この「仮住まいの身」という自己理解をキリスト信仰における重要な視点に据えようとしているのである。

・日課箇所は、本書簡のまとめ部分を構成しており、諸教会の「長老」と「若い人たち」に向けた勧告となっている。ここで「長老(プレジビュテロス)」は、すでに教会共同体における一定の職務を指して用いられているようであるが、一方で「若い人たち(ネオス)」は職務を指す用語ではなく、この二つが並べられることには多少違和感がある。当時のユダヤ人社会では、「長老」が一定の社会制度化された指導者を指す用語としても用いられていたため、教会が「長老」職を指導者として位置づけるようになったものと考えられる。しかし、元来「プレジビュテロス」は、「年長者」の意味があるので、ここでは、「年長者＝信仰歴の長いベテラン信者」と「若年者＝信仰歴の短い新人信者」という用法で勧告を展開しているとも考えられる。本書簡は、全体として、キリスト信者としての自己理解を教える内容で一貫しており、新しく信者となったばかりの者たちと、彼らを指導する立場にある者との双方に向けた勧告であるのは明らかであるから、「長老」が制度的なものであるかどうかは、必ずしも本質的なことではない。

・2節は、全体として「牧しなさい(ポイマイノー)」に係っているが、写本によって「世話をしなさい(エπισコペオー)」が補足されている。「エπισコペオー」は、「エπισコpos(監督)」を派生語とする語で、「上から注視する」が語義。おそらく、「長老」を「監督」職と同一視していく初期教会の展開の中で補足された。

・日課箇所の勧告は全体として、5節後半「皆互いに謙遜(タペイノフロシュネー)を…」に集約されている。「タペイノフロシュネー」は、「謙虚」を意味する語だが、ニュアンスとしては「謙虚な態度」を指して用いられ、場合によっては「表面上の謙虚さ」も意味する。

福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、「良い羊飼いのたとえ」で知られる。福音書の構成文脈上、前章(9 章)で物語られた「生まれつきの盲人のいやし」に関連してファリサイ派との間で議論になった場面の中に置かれており、日課箇所の直後には、この箇所での教えを巡ってユダヤ人の間で対立が深まったという状況描写が続いている。注意すべきは、その対立の描写の中で「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている」(20 節)という、共観福音書では「ベルゼブル論争」の逸話伝承の中で取り上げられる誹謗中傷の言葉が置かれていることである。日課箇所および前段(1~6 節)の全体が、弟子たちに対する教えというよりも、対立するファリサイ派らユダヤ人指導者に対する当て擦りとして語られたものであって、そうであればこそ「悪霊に取りつかれて」という誹謗になっているということである。そこで、文脈に沿った解釈ということからすれば、「良い羊飼いと羊の関係」をたとえとして主イエスが弟子たちや人々との関係を教えようとした、とは必ずしも言えないことになる。教会実践上、この箇所は、主イエスが弟子たちや将来弟子になるであろう者に対して、「良い羊飼いい」として命がけでお働きくださるという恵みを教える箇所として用いられることが多い。しかし、聖書解釈上は、そこにとどまらず、主イエスを模範として従い、主イエスの御業と御言葉を継承する弟子たちが、教会指導者としていかに振る舞うべきか、「良い羊飼いい」としていかに教会という「羊の群れ」を守り導くかを、反面教師としてのユダヤ人指導者を背後に想像させながら教えている箇所として理解されるべきである。

・この箇所は「良い羊飼いのたとえ」として知られるが、前段(1~6 節)を含めたまとまりで見たとき、実は「門(テューラ)」が鍵語となっている(1,2,7,9 節)。この語は、20 章の復活顕現伝承の中で、弟子たちが集まって閉じこもっている家の鍵の掛けられた「戸」としても出てくる(20:19,26)。つまり、復活顕現伝承で「閉じられ鍵の掛けられた戸」はいかにして開かれ、出入りが再開されるのかという条件をあらかじめ示す伏線としても、このまとまりは機能しているのである。なお、このまとまり箇所の中で、「門」の前提となる「囲い(アウレー)」も、1 節と 16 節で使用されており、大枠が「羊の群れの囲い」というイメージの中にあることも分かる。

・14 節以下では、羊飼いと羊の関係が、ここでは、「父(である神)と子(であるイエス)」との関係を示すたとえにもなっていることに注意。

来週の誕生日 (5 月 1 日~7 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-120 番「主はわがかいぬし」(= II 41)は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシ

ス・ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。

・21-57 番「ガリラヤの風がおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともいうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。

・21-459 番「飼い主わが主よ」(= I 354「牧主わが主よ」)は、19 世紀前半に英国教会司祭の娘で讃美歌作家として活躍したドロシー・スラップの作詞とされるが、詳細は不明。曲は、19 世紀米国の音楽家で多くの教会音楽も作曲しているブラッドベリーの作。

・21-81 番「主の食卓を囲み(マラナ・タ)」は、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏(ツグトシ)が、I コリ 16:22 の「マラナ・タ(主よ、来てください)」等に基づき、主の祈りの中心主題を黙想する中で 10 年かけて作詞作曲。新垣は第二ヴァチカン公会議後の典礼改革の中で進められた母国語聖歌創作をリードしてきた一人で、多くの聖歌・讃美歌が教派を越えて歌われている。

21-120「主はわがかいぬし」

The Lord's my shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

21-459「飼い主わが主よ」

Savior, Like A Shepherd Lead Me

1. Savior, like a shepherd lead us, / much we need thy tender care; / in thy pleasant pastures feed us, / for our use thy folds prepare. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are.
2. We are thine, thou dost befriend us, / be the guardian of our way; / keep thy flock, from sin defend us, / seek us when we go astray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray.
3. Thou hast promised to receive us, / poor and sinful though we be; / thou hast mercy to relieve us, / grace to cleanse and power to free. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee.
4. Early let us seek thy favor, / early let us do thy will; / blessed Lord and only Savior, / with thy love our bosoms fill. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still.